

義肢の過去、現在、未来

人類は第一次世界大戦と第二次世界大戦という大きな戦争を経験しました。この戦争により義肢を必要とする切断者が増えました。各国では義肢の研究が盛んになり、このころに大腿義足の四辺形ソケットや吸着式ソケット、PTB式下腿義足、能動義手などの研究開発がされました。これが現在普及している義手義足の基礎理論になっています。

わが国においても、日清戦争、日露戦争を経験し、切断者のために恩賜の義肢が支給されました。しかし、実用性に乏しくあまり使用されなかったようです。日中戦争や第二次世界大戦が勃発し、戦傷による多くの切断者がでました。この切断者のために「鉄脚」いわゆる義足が作られ、義手では「十五年式陸軍制式義手」という作業用の義手が開発されました。どちらも、その当時としては素晴らしいものでしたが、欧米諸国と比較するとそれらの技術水準は大きく遅れ、第一次世界大戦ころのレベルのものでした。

終戦後、傷痍軍人のために義肢を供給していた陸軍の施設は廃止となり、その施設は国立相模原病院義肢科に移されました。これが現在の国立障害者リハビリテーションセンターの前身です。

昭和31年ころから日本は遅れを取り戻すため、米国から講師を招き、義肢製作技術研修会を行いました。さらに昭和37年国立身体障害者付属補装具技術研修所を設立し、補装具製作技術の伝達講習も行われるようになりました。

わが国の義肢装具は、欧米諸国から40～50年遅れているといわれていましたが、新しい技術を積極的に取り入れることで、目覚ましい発展を遂げました。

今回の展示では古い義肢から現在、未来の義肢の実物や写真をご紹介します。また、日本が昭和30年代、新しい義肢装具の知識や技術を欧米から導入したころの講習会やそのころの製作技術などの貴重な映像もご覧いただけます。

過去から現在までの歴史の変遷を知ることで、これから未来へ向けた進歩の方向性を考えていただければと思います。

研究代表者：義肢装具技術研究部

hosougu@rehab.go.jp